

星はなんでも



ブザーの音とともに照明がゆつくりと落ちていき、最後に足下灯も消されると、場内は完全に暗くなる。

『本日は当プラネタリウムにお越しくださり、誠にありがとうございます』

開演挨拶と同時に座席が動き出し、空を見上げやすい角度に傾いてゆく。一部の席からは子供たちの歓声があり、それをたしなめる母親の声小さく聞こえてきた。『今年もまた、流星群の時期がやってきました。今年の極大日は次の日曜日。今朝、気象庁から発表された予報によれば、幸いなことに晴れとなっています。では、その日の空を映してみましよう』

声に合わせて、それまでただの暗闇だった空に月と星が、ドームと壁が示す地平線の上にははばたき市と思われる街並みが映し出される。

しかし映し出されている星の数はかなり少ない。それが不満なのか「これだけ?」「見えない」といったブーイングの声があがった。

こういった反応が返ってくることはプログラムを進め

る上で想定済みなのだろう。ナレーターは驚きもせず言葉が続ける。

『映し出されている星が少ないことに驚きましたか?』

今みなさんが見ている空は、このプラネタリウムから実際に見える空を映しています。なぜ、こんなに星が少ないのでしょうか』

その言葉とともに、映し出された空の下部——建物のシルエットが小さく点滅する。

『犯人ははばたき市の建物にある、ネオンたちです。繁華街のネオンが明るすぎて、星の光が負けてしまい、なかなか見ることができません。困りましたね。これだけ明るいとなかなか流星群も見ることができません』

えーっという声があがる。今度は多少、大人の声も混じっているようだった。

『ご安心ください。このはばたき市でも、今度の流星群を観測するのにちょうどいい場所があります。では場所をそこ——はばたき山へと移動して見ましようか』

地平の建物群がだんだんと姿を消し、空が少しずつ暗くなる。それと同時に、少しだけ見えていた空の星たちが明るさを増してゆく。

空の暗さと比例して増えてゆく星に、先程とは違う歓声があがった。



「今夜の天気は晴れときどき曇り。気温はあまり下がりませんが、日が落ちたころから風が出て、思いの外涼しく過ごせるでしょう。明日の天気です……」

予報士の声に合わせて、画面に表示されている天気図が次々に切り替わる。今夜の予報から、明日の予報に切り替わり、しばらくして一週間の天気予報へ。お盆に入ったというのに、まだまだ暑さが収まる気配はなさそうだった。

この辺りの天気を簡単に確認し終わったところで、リモコンを操作してテレビを消す。特に出かける用事があるわけでもなく、なぜか明日の天気というものは気になつてしまうから不思議だ。

いや、こう暑い日が続くと、案外自然なことかもしれない。つつい、涼しい季節がやってくるのを待ちわびてしまい、結果的に天気予報をみる頻度が上がっていく。まだしばらく暑い日が続くという感覚を肌で感じているのに、それが訂正されるのを待っている。……今のところ予報の内容が変わりそうな気配は、やはりないが。テレビから聞こえる声がなくなった今、小波家のテレビ

ングにはそれまで気にならない大きさだった蝉の鳴き声が大きく響いている。蝉時雨というには物足りない、それでも決して静かだとは言えない音の高さは、なんとも夏という空気を作っていた。

天気予報では今夜は涼しいようなことを言っていたが、実際はどうなんだろう？ そんなことを思いながら冷蔵庫を開けて、冷えた麦茶を取り出す。

麦茶をコップに注ぐと小さな渦がくるくと周り、氷が涼しげな音を立てる。あつと言う間に水滴だらけになつてしまったそれに口をつけると、ようやく暑さが少し和らいだのだろうか。

「ふうっ」

と雪が息をつく。

別に、雪の部屋にエアコンがないわけじゃない。ただ暑いからといってずつとつけたまましていると体が冷えて辛くなる。仕方なくこまめに付けたたり消したりすることで。冷えを防いでいる。その分温度が低くならないこともあって、のどが渇きやすいのが少し難点だった。

「エアコン付けっぱなしにして少し厚着したほうがいいのかな」

そんなことを思いながらもう一口飲む。
麦茶というものは、何度飲んでも、いつ飲んでも、ど

こか懐かしく感じられるのが面白い。

「うん、やつぱり夏は麦茶だよね」

思わずそんな言葉が口から出た瞬間、それに答えるかのように、テーブルの上に置いていた携帯電話が鳴り響いた。

まるではかっていたかのようなタイミングに、少し恥ずかしそうな顔で雪が電話を取り、そこに表示された名前を確認して、それに出る。

「ミヨ？」

「バンビ。……何か驚くようなことがあった？ 少し、気になる」

動揺が声に出ているのだろうか、すぐに携帯電話の向こう——宇賀神みよが心配するような声で尋ねてくる。

「ううん、ちょっと、タイミングが良かったから」

「そう？」

「うん。ええと、どうしたの？」

これ以上深追いされる前に話を元の流れに戻そうとした雪の言葉に返ってきたのは、みよからの意外な提案だった。

「バンビ。これから、はばたき山へ行こう」

みよの言葉に雪は思わず時計を確認する。時計の短針はもう四の数字を越している。これからはばたき山へ出

かけるとなると、そこそこ遅い時間になるのは間違いない。

「これから？」

「そう」

「花火でもするの？」

思わず確かめてみるが、山の中で花火をして火事になったら、と心配するまでもない。流石に花火はないだろう。はばたき海岸でやる方が近いし、だいいち、広い。わざわざ山の中で花火をする理由が雪には思いつかない。あり得るとしたら、他にも同じことを考えて花火をする人々を避ける、という理由くらいだろうか。それでも、わざわざ山まで行く程の理由だとも思えない。

「違う。バンビ、今日はたくさんの星が流れる。すごく綺麗」

そう言われて、雪は今朝見た新聞を思い出すと、テレビ台のすぐ側に仕舞われたそれを広げる。社会面の片隅に、今晚は流星群の極大日——流星がもつとも多く見られる日だということが書かれていた。

「これかな？ 流星群の極大日」

「そう。この辺りだとはばたき山が一番綺麗に見える」

「少し見てみたい、かな」

「そう言うと思った。これからバス停で待ってる」